



①故郷の原風景を描いた「久比岐野十二景」より《寒月》。群青の空と銀の満月が美しい ②同じく「久比岐野十二景」より《親鸞の海》。素材の凹凸を雲や波に生かしている。表面の細かい凹凸が繊細な白波をうかがわせる ③高田駅入口のステンドグラス「高田の四季」より《桜》 ④柴田さんが手がけた「灯の回廊」の題字と左下の「冬の上越市」

西暦	年齢	上越市を中心とした主な出来事
1949	0歳	5月7日、現在の上越市西城町に生まれる。
1976	27歳	多摩美術大学大学院美術研究科日本画専攻を修了。第3回創画展で《ガンジス河》が創画会賞を受賞(1983、1986も受賞)し、創画会会友に推挙される。
1980	31歳	文化庁主催 第19回全国県展選抜展招待で文部大臣賞を受賞。
1988	39歳	第15回創画展で創画会賞を受賞し、創画会会員に推挙される。
1989	40歳	上越市で初の個展を開催(大和上越店)。
1991	42歳	旧上越観光物産センターのステンドグラスをデザイン。
1992	43歳	上越市展の審査員に就任(～1996)。
1994	45歳	雅子妃の森のモニュメントをデザイン。
1999	50歳	雁木通りプラザのステンドグラスをデザイン。
2001	52歳	上越市発足30周年記念事業として大和上越店で個展を開催。
2002	53歳	高田駅のステンドグラスをデザイン。
2006	57歳	総合博物館で「柴田長俊展」を開催。
2008	59歳	城北中学校のステンドグラスをデザイン。
2011	62歳	上越市シティ・イメージ・アドバイザーを務め、観桜会をはじめ、市の観光ポスターをデザイン(～2014)。
2013	64歳	ミュゼ雪小町オープン記念として個展を開催。
2015	66歳	上越妙高駅のステンドグラスをデザイン。
2022	72歳	1月28日死去。



軽井沢の自宅兼アトリエにて(2013年5月2日齋藤亮一撮影)

【特集】 小林古径記念美術館 企画展「柴田長俊展」

柴田長俊の足跡をたどる

上越妙高駅の東口に設置されているステンドグラスが、本市出身の日本画家である故・柴田長俊さんによるものであることをご存じですか。柴田さんはどんな人だったのか、故郷へどのような想いを持っていたのか、小林古径記念美術館での「柴田長俊展」の開催に合わせて紹介します。

私たちの生活に溶け込む作品たち

故郷である上越市では、柴田さんが手がけた作品を数多く目にする事ができます。例えば、ステンドグラス。上越妙高駅や高田駅など5つの公共施設に、今もすてきな作品が据えられています。

この「広報上越」も、2012(平成24)年1月15日号から2022(令和4)年12月号までの間、柴田さんが手がけた題字を用いていました。当市の冬の風物詩となった雪灯りのイベント「灯の回廊」の名付け親でもあり、デザインした題字は今でもポスターやパンフレットに使われています。

「祈り」に対する想い

幼少期、自然豊かな上越で暮らし、た経験は柴田さんの原風景となり、高校時代には民俗学者・柳田國男の著書に触れ、民俗学に興味を持ちます。その後15回にもわたって世界中を旅し、訪れた先々でさまざまな信仰や生と死の在り様に触れる中で、

自然に対する畏敬の念や人々の「祈り」に対する想いを強めていきました。自身が体感したそれらを表現し、人に伝える手法として選んだのが、自然由来の岩絵具を用いて描く「日本画」であり、教会など祈りの場を目にした「ステンドグラス」だったのではないかと思います。

重厚さと装飾性が「力」を増す

柴田さんの絵画作品は、油彩画にも見えるほどの厚い塗りと、印象強い装飾性が特徴的です。想いを込めるように、金や銀、岩絵具を惜しみなく用い、幾重にも色を重ねて描かれた作品から感じられる重厚さは、その前を素通りできないほどの強い印象を見る人に与えます。

そして、柴田さんがこだわったのが、画材と素材です。例えば、ラピスラズリやアズライトなどの鉱物を砕いて使われた「群青」色の岩絵具は、間近で見るとキラキラと輝き、絵がまとう神秘的な雰囲気さをさらに引き立たせています。また、絵の下地となる板に紙や布を貼らずに直接色を塗り、あえて素材の木目や凹凸を生かすことで立体感や質感を表現しています。

色の重厚さと岩絵具のきらめきにより柴田さんの作品から受ける「力」をぜひ感じてほしいですね。



小林古径記念美術館 伊藤 舞実 学芸員

柴田長俊という“人”



柴田長俊さんの妻
柴田法子さん

夫は、暗くて重たい雪ではなく、澄んだ空と雪景色を描いていました

お話を伺った軽井沢のアトリエ。法子さんの後ろの棚にずらりと並ぶ岩絵具が圧巻。

その人となり

生前の夫を思い起こすと、楽しそうに絵を描いていた印象がありますね。好奇心が旺盛で、誰にでも話しかけるところがあったので、旅先で知り合った外国人を突然自宅に招くなど、驚かされたこともありました。

一方で、自身の内にこもった強い想いを言葉でうまく表現することは苦手でしたので、作品を通してその想いを人に伝えたかったのだと思います。

故郷の心象風景と「祈り」

夫は「祈り」を追い求めていました。人の想い「祈り」に、自分の気持ちを重ねていく。そうやって描いていました。晩年は山を多く描いていましたが、人々が信仰の対象とする山に対して、強い想いがあったのだと思います。特に自身の原風景でもある妙高山への畏怖の念は強く、スケッチもたくさん残っています。

故郷の風景は「自分にとって忘れられない景色」であり、「その景色を眺たまさにそのとき、自分は何か大きなものに祈っていたんだと思う」と言っていました。妙高山や故郷の風景を描いた作品には、上越への郷愁や望郷の想いととも、当時抱いていた「祈り」

の気持ちが凝縮されているのだと思います。

上越への想いと「明るい雪」

上越を語る上で切り離せないのは、雪だと思えます。子どもの頃から、まちや田畑が一面雪で覆われる景色を見ていたので、「自分の基本にあるのは雪景色だ」と話していました。その雪も、「自分は重く暗いイメージの雪ではなく、『明るい雪』を描きたい。暗い雪雲の上には青く澄んだ空が広がっている。それを表現したいんだ」と言っています。



上/妙高山のスケッチ。リアルなものからラフなものまで多くのスケッチが残っている
右/柴田さんの実家は元呉服店であり、気に入った端切れをコラージュに使っていたそう。「私のストールが見当たらないと思ったら、いつの間にかここに仲間入りしてて…」と笑いながら話す法子さん

澄んだ空と雪景色を描いていました。

また、アトリエにはさまざまな題字のデザインが残っていますが、そのほとんどが上越に関係するものです。きっと、故郷の上越市に貢献したいという気持ちが強かったのでしょうか。

こだわり抜いた色と素材

自然への畏敬の念が根底にあった夫は、「岩絵具」にこだわっていました。大きな作品には大量の絵の具を使いますし、また色そのものへのこだわりも強く持っていましたので、あるときから珊瑚やラピスラズリなどの鉱物を自

ら仕入れ、砕くところから創作を始めていました。岩絵具は、細かく砕くほど色が薄くなります。砕いた鉱物などを網の目の細かさが異なるふるいにかけて、粉の細かさごとに分けるのは、私たち家族の仕事だったんですよ。夫は絵のほか、ステンドグラスの制作にも精力的でした。透き通るような色への憧れがあったのでしょうか。ステンドグラスに日の光が差して偶然現れる色や光の見え方など、自身の力及ばないもの（＝自然）が想像以上のものを魅せてくれることに大きな魅力を感じていたようです。

絵を描くために使用する板や絵を入れる額の装飾、晩年に多く制作したコラージュ作品に用いた素材は、あえて人が作ったものや使ったものを用いていました。人が関わり、人の思い出があるものを使うことで、「人の想い」を作品に込めたかったようです。

市民の皆さんへ

ぜひ、今回の企画展で、夫が作品に込めた「祈り」や故郷に対する想いを感じ取ってもらえたらうれしいです。



上/柴田さんがデザインした題字などの図案。ほとんどが上越市に関わるものであることが分かる左/鮮やかな赤色に使われる珊瑚。旅先で良いと思ったものを仕入れていたそう

柴田長俊展 - 祈りの心象 -

生涯を通じて「祈りの風景」を描いてきた柴田さんの日本画およびステンドグラス作品を展示し、柴田さんに内在する「祈りの心象」を紹介します。

- ▶と き…6月23日⑩まで
- ▶ところ…小林古径記念美術館（高田城址公園内）
- ▶開 館…午前9時～午後5時（4月1日⑩～14日⑩は午後7時まで延長）
- ▶休 館…月曜日（祝日の場合は翌日）
※観桜会期間、ゴールデンウィーク中は無休
- ▶入館料…一般510円、小・中高生260円（幼児、市内小・中学生は無料）
- ▶問合せ…小林古径記念美術館（☎025-523-8680）

学芸員によるギャラリートーク
学芸員による解説を聴きながら、じっくり鑑賞しませんか。
▶と き…4月27日⑩、5月25日⑩、6月8日⑩の午後1時30分～



美術館
ホームページ

展覧会	なつかしき表紙絵 玉井力三展	大塚いちお展	コレクション展 花にまつわる物語
	7月6日⑩～9月1日⑩	9月14日⑩～11月24日⑩	12月7日⑩～令和7年3月9日⑩